

「団地裏地団」

音楽。

低音響く中、104号室に明かりが差し込む。

男の姿が浮かび上がる。

途端に喋り出す。

男

「見える範囲

悟る安易

浸る甘美

語る度

起こる参事

あたう万死

くらう惨死

死体安置

一時万事

ヤバい暗示

危機を感知

疑心暗鬼

削るSAN値

逃げるが勝ち

走る団地

脱ぐ普段着

23時

消える安否

ここ何番地

降りる遮断機

死を感じ

マジで卍

まるでジュマンジ

ガチのガチ

あかんマジ

レベルだんち

おともだち

こどもたち

はしれあっち

ゆれるだんち

ふえるだんち

さよならんち

まよなかんち

わおなまんち

あおああんち

ううああんち

おおおあんち

ああんち

あんち

ああち

あち

ち

ち

ち

ち

・

・

・」

徐々に言葉が崩れていき、
語気は荒がり、呂律が回らなくなる。
次に204号室に明かりが灯り、女が語り出す。

女
「見える範囲
悟る安易
浸る甘美
語る度
起こる参事
あたう万死
くろう惨死
死体安置」

302号室に明かりが灯る。
女と一緒に語り出す。

2人
「一時万事
ヤバい暗示
危機を感知
疑心暗鬼
削るSAN値
逃げるが勝ち
走る団地
脱ぐ普段着」

更に追加で403号室。

3人
「23時
消える安否
ここ何番地
降りる遮断機」

追加で304号室と202号室と103号室。

6人
「死を感じ
マジで卍
まるでジュマンジ
ガチのガチ
あかんマジ
レベルだんち
おともだち
こどもたち
はしれあっち
ゆれるだんち
ふえるだんち
さよならんち
まよなかんち
わおなまんち
あおああんち
ううああんち
おおおあんち

ああんち
あんち
ああち
あち
ち
ち
ち
ち
チ
チ
チ
チ」

徐々に時計が針を刻む音に変わっていく。
女が二人で部屋を漁っている。
慎重に扉を開けたり、
襖を開けたり、
冷蔵庫を開けたり、
とにかく開けれるものは開けていく二人。

チ、チ、チ、チ、
という針の音が次第に、
コツ、コツ、コツ、
という足音に変化していく。

動きを止めて警戒する二人。

コツ、コツ、という音が近づいてきて、止まる。
二人はそれぞれ別の場所に隠れる。

鍵を回す音がし、ギィーと扉が開く。
誰かが部屋に入ってくる気配がする。
扉はガチャンと閉められ、また鍵をかける音がする。
二人は息を殺している。

手を洗って、うがいをする音が聞こえる。
冷蔵庫を開けて缶ビールを開ける音が聞こえる。

足音が部屋に響く。

間。

前触れなくスゥーッと襖が開かれる。
中に隠れていた一人があらわになる。
襖を開けた男は、女の姿を認め、固まる。
途端、動転して逃げ出す男。

女「怪しくありません！」

男「？」

女「めっちゃ一般人、大学生です。何も怪しくありません私！」

男「無理無理。怪しいとかじゃなくてアウトやから。」

女「好奇心お持ちですか？」

男「は？」

女「あなたがもし好奇心をお持ちならば私の話に耳を貸すべきです。」

スマホで警察に電話しようとする。

女「それは良く無い。全く良く無い。あなたにとっても、我々にとっても。」

男は動きを止める。

男「我々？一人じゃ無いのか？」

背後にもう一人の女が近づいていた。

男の背中にペンを当てる。

女2「動くな。動くな。このままナイフを刺し込む。刃は肋骨に阻まれないように寝かせて、腕力は自信がないので体重を乗せて押し込むように刺す。」

男「・・・」

女「スマホ、いただきますね〜。」

男からスマホを受け取る。

女2「65年後、あなたは生きてると思いますか？」

男「あなたが今刺さなければ生きてるかも。」

女2「生きていたとしても、老い先短い、この団地のように。循環は無く、徐々に人が立ち退き、取り壊されるこの団地のように。」

女「ここの団地、取り壊された後、何になると思います？」

男「さあ。駐車場？」

女「正解は、何にもならないんです。」

女2「ただ無くなる。ただ消える。ただ死ぬ。65年使い倒されて、熟成されて、熟れに熟れて、そして腐ってゆく。部屋が一つ一つ腐って死んでゆく。細胞が一つ一つ死んでゆく。」

男の腕と足をガムテープでぐるぐるっと巻く。

女2「この棟はまだ比較的細胞が生きていますが、他の棟はもう屍です。窓や入り口はベニヤで塞がれ、呼吸をしていません。いずれここもそうなります。だから私たちは、死ぬ前にやれることをやりたいのです。」

女「水を一杯、いただきます〜。」

女2「物盗り、空き巣じゃありません。ただ、裏口を探しているだけなんです。」

男「この部屋の出入り口は玄関一個だぞ？」

女「そうとは限りません。」

水を見せる。

女「死んだ部屋の水はやや濁っているんですよ。でもそれは水が濁っているのか、自分の目が濁っているのか、常に疑うべきなんです。」

水を飲む。

女「ぷは〜。」

家探しの続きをする2人。

2人に向けて声が投げかけられる。

見える範囲
悟る安易
浸る甘美
語る度
起こる参事
あたう万死
くろう惨死
死体安置
一時万事
ヤバい暗示
危機を感知
疑心暗鬼
削るSAN値
逃げるが勝ち
走る団地
消える安否

1 0 1 同じKu-kan
1 0 2 同じKu-kan
1 0 3 同じKu-kan
1 0 4 同じKu-kan
2 0 1 同じKu-kan
2 0 2 同じKu-kan
2 0 3 0 4 0 5 0 同じKu-kan
だけど別世界 同じKu-kan
だけど別世界 隣の部屋
だけど別世界 同じ間取り
だけど別世界 同じ広さ

だけど別世界 同じ人間
だけど別世界 同じ人種
だけど別世界 同じ言語
だけど別世界 同じ世界
だけど別世界 お帰りなさい
お帰りなさい お帰りなさい

帰宅時間。
死にかけの団地を通り過ぎて人々が帰っていく。
影法師が伸びて団地を巨人が通っていくかのよう。
カラスの鳴き声がする。

ザッザッザッザ
チッチッチッチ
ザッザッザッザ
チッチッチッチ

別々の部屋を探索していた2人。

女「裏口あった？」

首を横に振る女2。

女「そっか。」
女2「あの男どうしよう。」
女「ほっといたら駄目かな。」
女2「流石に。」

女「どうせ不法侵入で捕まるし、裏口が見つかるまで監禁しておくとか。」

女2「マジで言ってる？」

女「私たちの青春は止められないのよ。次は・・・104ならこの時間は家に誰もいないはず。」

女2「何言ってるの？」

女「え？」

女2「この部屋が104じゃない。」

女「そんな筈はない。私たちは401にいる。」

女2「じゃあなぜ玄関に104と記してあったの。」

女「え・・・それほんと？」

チッチッチッチ

チッチッチッチ

女「本当だとするなら・・・この時間にあの男がいるのはおかしいし、それに、」

女2「それに？」

女「この部屋の住人は女性よ。」

男のいる部屋の方を振り向く2人。

女2「じゃああれは、誰？」

女「水が濁っているのか、自分の目が濁っているのか、常に疑うべきだった。」

女2「窓から出よう。」

2人は窓から脱出しようとする。

だけど別世界 同じKu-kan

だけど別世界 隣の部屋

だけど別世界 同じ間取り

だけど別世界 お帰りなさい

お帰りなさい お帰りなさい

帰りの人々が次々と団地の前を通っていく。

列をなして、規則的に。

一人一人性格や生い立ちが違うのに、
「大勢」という一群に見えてしまう。

女2「帰宅ラッシュだ。」

女「見られたかな。」

女2「一旦私の部屋へ戻ろう。」

ガラガラと窓が開く音がする。

するとガムテープを解いた男が、
上階から彼女らを見下ろしている。
男は無言、無表情。

女2「私の部屋はやばいな。とにかく路地裏を逃げよう。」

チッチッチッチ

一時万事

ヤバイ暗示

危機を感知

疑心暗鬼

削るSAN値

逃げるが勝ち

走る団地 チッチ

DAN チッチッチッチ

DAN チッチッチッチ

DAN チッ DAN チッ DAN チッ DAN チッ

DAN チッ DAN チッ DAN チッ DAN チッ

帰宅途中の人々をすり抜けて逃げる2人。

男は淡々と追いかけてくる。

規則正しい団地の作りを、

規則正しく人々が歩く。

その中を不規則に移動する2人と1人。

女1と女2の足並みが揃わなくなる。

女2の情景が歪む。

団地の景色が静かになっていく。

浮遊感のある音とともに、

昼間の人気のない団地の風景が広がる。

団地が女2の心中を語り出す。

裸電球に蛾がガ舞い、

ラジオがガガ鳴り、

禍ガ々しい廃団地も、

工事でガガガと崩される。

古い物は魂が宿り、

怪異の類に成り果てる。

この団地ももしかしたら、

怪物になっているのかもしれない。

仄暗い昼の廊下は、

息を殺してしまう。

人家の匂い漂う夜の廊下は、

細々とした体温が物悲しい。

廊下の先は明るい行き止まり。

壁に髑髏の落書き。

全てを飲み込むブラックホールが、

階段の天井に空いている。

そこから一匹の蛾が飛んできて、

私を捉えて穴へ飛ぶ。

化け物団地に食される。

団地の垢の一部にされる。

いたずら落書きの仲間にされる。

吸い込まれる私の足が、途端パシと掴まれた。

見れば若い男性が、吸い込ませまいと踏ん張っている。

この人のこと、知っている。

一つ上の階に住む学生だ。

彼は乱暴に私を地面に捨て下ろし、

優しく蛾を掴んで放った。

逆だろ、と思った。

逆だろ、と思った。

逆だろ！と！思った！けど！

私はときめいてしまった！

胸は高鳴り！

鼓動はドンドンとビートを刻み！

私は階段の踊り場で、踊った！

踊る女2

他の部屋の住人たちも一緒に踊る

それから私は、毎日踊り場で踊った！
扉を開けて、階段に差し掛かるたびに彼と出会うから！
だって彼の生活パターンを調べたから！
下る時も登る時も足元はステップステップステップ！
ああ！挨拶がしたい！仲良くなりたい！
と思いながら彼が捨てたゴミ袋を漁ろうとして気づいたの。
彼のことが好きなんだって。
思いを伝えなきゃって。
じゃないとゴミ漁っちゃう！
団地が取り壊される前に告っちゃえて！

女「ねえ。」
女2「え？」
女「あれって・・あんたが探してる人じゃない？」

帰宅する人々の中に例の学生が混じっている。

女2「ほんとだ・・」
女「失踪したんじゃないの？」
女2「告んなきゃ・・」
女「今！？」

2人は学生を追いかける。
人々の脇をかき分け進む。
1人の主婦にぶつかる。

女「ごめんなさい！」
主婦「・・・」

2人はそのまま学生を追いかける。
主婦は自宅の扉を開け、買ってきた食材を玄関にドサッと置く。

主婦「のり？おるん？」

主婦は自宅の廊下や部屋を探す。

主婦「のり？帰ってんの？」

すると女子中学生らしき子供が倒れている。

主婦「のり・・？のり！！」

駆け寄ろうとすると、中学生は痙攣しだす。
そしてそのまま立ち上がり、ケロツとした様子になる。

のり「おかえりお母さん。」
主婦「・・大丈夫なん？」
のり「はっは。」
のり「おかえりお母さん。」

そう言って主婦の横を通り、
玄関においてあるエコバッグを散らかして、
大根などを貪り出す。